ごあいさつ

～non-lenserにこめる想い～

株式会社　桜　代表取締役
復元納棺師・おもかげ復元師
笹原 留似子

non-lenserの完成に当たり、
ご尽力いただきました皆様に心より感謝を申し上げます。

振り返ること10年前の東日本大震災発生時、
ご遺体復元と遺族支援活動の中で見た光景、
多くの機関の皆さんが交換する感染管理備品がない中で工夫して、
活動にご尽力されていた姿を度々思い起こし、
コロナ禍の影響と震災から10年を機にnon-lenserの制作に入りました。
災害を経験した被災地では今、COVID-19という災害が重なり各地で対応をしています。
そしてまた、この上に新たな災害が発生したら…。
多くの地域では様々な団体・機関が、これから発生するであろう幾つも重なる災害に対応すべく
根拠に基づき訓練などを行い、迅速に動けるよう全国各地で談じ合いが行われています。

その状況下の中で生まれたnon-lenserは現場に合わせて何度も書き直し、デザインを完成させ、
弊社で意匠登録の申請を致しました。縫製、シールド加工、特殊紙など様々に各業界の最新の特許や技術を
活かし、7社で完成させたnon-lenserです。県内外、コロナ禍の中でご尽力される多くの医師の皆様の
応援を受ける中、災害から生まれた感染防御ガウンnon-lenser。
推薦文は災害専門医でもある眞瀬智彦教授、高宮正隆教授、熊谷章子准教授、災害を経験されて伝承活動をされている
後藤康文院長にお願い致しました。Presentation時には多くお知恵をいただき、
現場の現状として脱衣の難しさが議論されていること等、様々な詳細を御教授いただきました。

私も現場で感じていましたが多くの現場でも「着脱」に時間を要することが課題でした。
次々と変更又は増えていく装備品に合わせると、次第に「脱衣」は困難を極めます。
「現場に立つひと、一人一人が得意不得意に関わらずに、もっと時間を短縮して感染防御ガウンの着脱を
行うことが出来たら。」と悩み考えました。現場の人が“本来の目的業務に集中できること”が最も大切で、
何のための感染防御かという原点に戻り、そのために試行錯誤し、研究・開発の中では
「着衣」「業務内の安全性」「脱衣」と、ポイントを3つに絞り込みました。

完成時にはおかげさまで災害専門の諸先生からも高い評価をいただいたことで、
皆様の現場をより安全で迅速に進められるガウンであることを様々な根拠に基づき証明していただきました。
今後も益々研究開発を重ね、現場実践に向け、安全性に於いて最新の情報を取り入れ、迅速に対応できる防御ガウンを
探求し更新したいと考えています。研究・開発に当たり、non-lenser完成時にCOVID-19を含める各現場で
実証・検証していただいた関係各位様に併せて御礼申し上げます。

ご挨拶の最後になりますが私は2021年の春、小さな頃から可愛がってくれた身内を
COVID-19の感染により亡くしました。デルタ株でした。
遺された家族である従妹と何度も話し合いました。
私たちは遺族として、彼らを搬送し、声を掛け励まし続けてくれた
消防の皆様、そして目を落とすまでCOVID-19と一緒に戦い、
傍に居てくれた医療従事者の皆様に、「感染させてしまわなかっただろうか」という
家族側の不安を抱えつつ、「本人たちはどれだけ心強かっただろう」と結論を出しました。
未曽有の過酷な状況の中で、真摯に向き合っていただいた皆様に心から感謝を申し上げ、
ご挨拶に変えさせていただきます。

東日本大震災後、笹原 留似子が
被災された方々を描いたイラスト